

建築家 隈研吾×三鷹市長 河村孝
スペシャル対談ムービー

“百年の森”のまちづくり

概要版



三鷹市

「三鷹市都市デザインアドバイザー」に就任いただいた
世界的建築家の隈研吾氏と河村孝三鷹市長が、
“百年の森”のまちづくり※をテーマに、
今後の三鷹のまちづくりについて語り合いました。

(令和3年10月)

※“百年の森”のまちづくりとは、市全体をさまざまな緑地、里、樹木、農地を緑でつなぎ、緑あふれるまち並みにしていく取り組みです。

※この概要版は、YouTube 三鷹市公式動画チャンネルで配信している対談の内容を、活字でご覧いただけるように再構成したものです。

本編動画は下記の URL または二次元コードからご覧いただけます。

https://www.youtube.com/playlist?list=PLDGJ8nNHeXJlc_wybKKZrXzG4uQZ_SoLN



第一回



第二回

第一回 国際基督教大学にて

第二回 国立天文台にて

建築家 隈研吾

1954年生まれ。1990年、隈研吾建築都市設計事務所を設立。慶應義塾大学教授、東京大学教授を経て、現在、東京大学特別教授・名誉教授。30を超える国々でプロジェクトが進行中。自然と技術と人間の新しい関係を切り開く建築を提案。主な著書に『点・線・面』(岩波書店)、『ひとの住処』(新潮新書)、『負ける建築』(岩波書店)、『自然な建築』『小さな建築』(岩波新書)ほか多数。



三鷹市長 河村 孝

1954年、静岡市生まれ、67歳。1977年、早稲田大学卒業後、三鷹市に就職。企画部長として、都立井の頭恩賜公園への三鷹の森ジブリ美術館の誘致を実現。2003年から3期12年にわたり助役・副市長として市政を支える。(株)まちづくり三鷹代表取締役会長、(公財)三鷹市芸術文化振興財団理事長、(公財)三鷹国際交流協会理事長などを歴任し、2019年4月に第7代三鷹市長に就任(現在1期目)。まちづくりのコンセプトに“百年の森”構想を掲げる。

“百年の森”のまちづくり スペシャルムービー

第一回 @国際基督教大学

まちづくりの哲学を形にする 三鷹の新たな挑戦

【市長】 今回は「三鷹市都市デザインアドバイザー」を引き受けていただいて、ありがとうございます。委嘱式の写真を市の広報紙などで紹介したところ、市民の方が驚いて「世界の建築家・隈研吾先生に三鷹市がアドバイスを頼むなんてすごいな」と、大きな反響がありました。私はこれまで、さまざまな形でまちづくりに関わってきましたが、都市のデザインや景観がどういう様相になっているのかということは、市民の皆さんの意思にも深く関わる重要な課題だと感じています。

【隈】 通常だと、例えばこのICUの体育館のように、私は単体の建築を設計しています。ですが実は、今、市長が言われた通り、まちづくりには哲学が背後になければいけないと思っています。強い哲学があれば、まちは変えられるということを、この三鷹市で市民の方たちと一緒に実現したい。市長の“百年の森”という強い哲学を、私が空間の言葉に翻訳してお見せすることで「“百年の森”って、こういうことなんだ」と、市民の方たちと共有することができたら、三鷹市でまちづくりアドバイザーの仕事をやって良かったと思えるのではないかと考えています。

【市長】 ありがとうございます。三鷹のまちは、東京の都心の周辺にある住宅都市として発展する中で建物がどんどん建て詰まってきていて、このままでは三鷹の魅力である緑や畑などがなくなってしまう可能性もあると懸念しています。建物が虫食い状に、スプロール状に広がってきましたが、それを今、マイナスと捉えるのではなく、建物をとどめつつ、緑をもう一度復元するところも作っていく。そういう

ことが、三鷹のまちには必要だと思います。緑や森というのは、にぎわいやにぎやかさと対立的なものではなく、共存できるということを見せていきたい。最初は人工的に作られた明治神宮の森がそうであるように、おそらく日本の気候からすると、100年経つと森ができるんです。森をもっと広げていくこともできるし、森がにぎわいにもつながっていくということを示したいと思っています。

【隈】 今、地球環境問題が世界中で最大の関心事になっていますが、そのときに建て詰まった都市をどうやって森に還していくか、どうやって都市に緑を絡めていくかという課題については、新しいデザインの手法や新しい法律が出てきました。日本でも、立体都市公園制度などの諸制度が創設されたので、これからの可能性や道が拓けてきた。緑と都市の共存という課題を市長が考えられていて、それに応えられるデザインや材料、制度などのいろいろな道具だてがちょうどいい形に出そろったこの時期に、“百年の森”のプロジェクトが始まったというのは、タイミングがいいと思いますね。そういうタイミングを活かして、僕がいいアドバイスをできれば、三鷹はきっと、新しい緑の構想のモデルを作れるのではないかと。そんな可能性がある場所だと感じています。



隈研吾さんのデザイン・空間・ 人々が集う場に対する考え方

【隈】 このICUの体育館は、目の前に立派な並木があるので、並木に対して大きなガラスで開かれた空間となっていて、なおかつ非常に新しい技術で木を素材に造った建物なんです。今、木を使うことは地球温暖化対策にもつながるので、世界中がある意味、木の建築の大競争時代になりました。日本は木の建築のリーダーになりうる伝統のある国なので、ぜひ、そういう競争の中で日本の存在をアピールしたいと思いますね。

僕が世界の数多くのまちに関わった中でも、建築物を通してまちの緑のネットワーク全体が強くなったようなプロジェクトは、市民の方たちからとても喜ばれます。フランスに、小澤征爾さんが24歳で世界一になった世界指揮者コンクールを開催している、ブザンソンという文化都市があります。ブザンソンには川があるのですが、以前はまちと川が完全に離れていて、まちとは関係なく存在しているといった様子でした。そこで、私が造った新しい文化センターのプロジェクトでは建物の真ん中に穴が空いていて、建物の周りを回遊するといつのまにか川に行けるような設計にしたんです。すると、建物自体のコンテンツは文化センターなのですが、それによって緑のある新しい散歩道ができたことを市民の方たちがとても喜んでくれました。

今の世界で、市民の皆さんにどういうものがアピールするのかを見ていると、緑が一番アピールするように思います。アメリカでは、オレゴン州のポートランドというまちの日本庭園に、新しい美術館を作りました。ポートランドはアメリカで人気投票をすると、一番住みたいまちに選ばれるような人気のまちです。その理由として、緑の公園がたくさんあり、



歩くところがたくさんあるということが挙げられているので、やはり緑豊かであることは今、世界中で住みたいまちの決め手になっている気がします。

【市長】 歩いて楽しいまちというのは、これからのまちのキーコンセプトですよ。高齢者や子どもたちも含め、健康づくりのために歩くということは大事ですが、それだけではなく歩くこと自体を楽しめるような、自然と歩きたくなるまちというのは、素晴らしいことだと思います。

豊かな緑とにぎわいの共存で 今まで見たことのない駅前

【隈】 三鷹の森には、それぞれにパワーがあるように感じます。このICUの森は貴重種がたくさんあって、日本にはないようなキャンパスですし、国立天文台も日本に他にはない、特別な宝物です。それぞれの緑にパワーがあり、それぞれの森がちゃんとしたキャラクターを持っている。これがうまくつながってくると、東京近郊にはないような新しい緑のネットワークを実際に体験できる場所になるのではないかと思います。緑のネットワークをつくるうえで、駅前の場所はすごく重要です。僕はにぎわいがすごく好きで、駅前の場所というのはある種「建て詰まっている」ともいえるのですが、そのにぎわい感と緑と一緒になれば「こんな駅前今まで見たことない」というものができると思っています。三鷹にはぜひそういう場所になってほしいですね。

【市長】 緑が中心になると、今、先生がおっしゃったような生態系の問題や環境全体の問題、二酸化炭素の問題も全部関連してくっついてきます。以前は、にぎわいと緑の問題は水と油で、駅前の人たちに聞いても、自分の商店の前に樹木は植えないでほしいと言われるくらい「緑豊かであることイコールにぎわいがいいこと」という認識だったのですが、やり方によってはそうではないということ、駅前の人たち自身が気づいてくれました。安心して遊べる場所を作って子どもたちが大勢来れば、親も来るし、おじいちゃんおばあちゃんも来て、にぎわいができる。まずは、そういう場所を作ろうじゃないかという話が勉強会で出てきて、私はそれをヒントに「子どもの森」を計画しました。にぎわいと緑の問題というのは非常に

近い関係にあるということ、改めて認識する必要があるのではないかと考えています。

【隈】 その、「子ども」という視点も面白いと思いますね。森というのは、子どもたちにとって安全な環境であるだけではなくて、子どもを育ててくれる場所だと思います。最近の研究でも、自然が身近にあってその中で遊んだ子どもは、いろいろな意味で豊かな能力を身につけると言われ始めています。緑や森は、子ども自身を大きくしてくれる存在で、単なる安全安心以上のよさがあるんですね。そういう場としての「子どもの森」が三鷹の中で育っていくのは、私としても何か新しい、それ自体が新しい教育の提案でもあると感じます。

【市長】 私は森という言葉の中に、それを育てていくという意味で「成長」という意味が入っていると思っています。まさに、みんなで育てていく森。そういったコンセプトに通じているのだと思います。

50年、100年先を見据えた まちづくりの在り方を求めて

【市長】 “百年の森”という構想を出したときに、ファンタジーじゃないかという声が多く寄せられました。でも、これから50年先、100年先を考えたときに、子どもや孫の世代にどういう日本を、三鷹を残せるのかと考えると、このままでは絶対に行き詰まることを皆さんもなんとなく感じているはずで。例えば今、三鷹の駅前にはマンションがたくさんできています。ペンシルビルもいっぱいできています。そのまちが50年後、100年後もそのままあることはなく、建物はいつかは建て替わるし、さまざまな要因でまちは変わらざるを得ません。そのときに、「どういう方向で変わらなければいけないのか」ということを、私としては示したつもりなんです。具体的にはいろいろな方向性があって、例えば地球環境問題への対応として変わらなければいけないのであれば、それをどういうふうに制度化するかなど、今後さまざまな各論での課題が出てくると思います。その際に“百年の森”構想は、それらの一助になるはずで。市民の皆さんにも、自分のビルの建て替えのときに個別の利益だけではなく、「まち全体として価値を高めるためにどうするのか」と

いうことを考えていただくことが大切だと思います。日本はこの100年間、戦後だけで考えても焼け跡からここまで来たわけですから、大きく変わっているんです。今の日本は、当時の人から見れば想像がつかないくらいファンタジーです。ですから私たちも、これから100年後のファンタジーをどう具体化していくかという、その夢を抱かないと変わらないと思います。三鷹市は、モデルスケールとしてちょうどいい大きさのまちなので、ぜひ、先生からさまざまなアドバイスをいただきながら、変えていきたいと思っています。

【隈】 そうですね。市長が言われたとおり、戦後まだ75年。その間に以前の東京の緑やヒューマンスケールが一気に失われてしまって、今、大きな折り返し点に来ていると思います。この75年というのは、目の前のことに追われて走っていたらいつの間にか緑がなくなっていた75年だったので、これからの100年はもっと大きな目標を立てて、森に還すという方向へ折り返さないといけないうし、今までと同じようにやっていたらだめだと思います。そういうビジョンがあって、「この場所」という具体的なモデルケースがあるのが三鷹だと私は感じたので、この先、三鷹は面白くなりそうだと思います。



“百年の森”のまちづくり スペシャルムービー

第二回 @国立天文台

見つめ直し、さらに向上させたい 三鷹市の魅力

【市長】 今、国立天文台のドームの中にいますが、底冷えしますね。

【隈】 森の中にある神聖な空間にいる感じがいいですね。

【市長】 今ではこの辺りは、三鷹の中でもある意味特別な場所になっています。国際基督教大学も天文台も、その西側にある野川公園も、非常に緑の豊かな場所です。

【隈】 三鷹にはいろいろな顔があって面白いですよ。僕も今回、アドバイザーになって市内のさまざまな場所を見ましたが、毎回発見があります。まちのバラエティということだけではなく、「こんな場所があったんだ」「こんな自然も残っていたんだ」という感じで、場所によって都市化の度合いが違うんですね。ある意味、タイムスリップしたみたい感覚や時間を味わうこともできる。場所が混じっているだけでなく、いろいろな時間も混じっているのが、三鷹の面白いところだと思いました。

【市長】 そういう意味では、さまざまな顔を持つ三鷹をネットワークで結ぶことが大事です。市内各地を交通で結ぶことで、市民の方も「こういうところがあったんだ」と新たな発見をして、市内の小さな観光が楽しめるようになってきています。やはり、地元の我々が「面白い、素晴らしい」と思わないと、市外の人たちは面白いと思ってくれないと思うんです。我々がまず、ワクワクして楽しいと思えるところをいくつも発見して、それを結んでいくことが、また新しい発見につながっていくのだと思います。

【隈】 そうですね。やはり、自分の住んでいるところは普通だと思いがちです。これが当たり前だと思っているものが実は、外の人から見るとすごく面白いものだったりする。三鷹には特に、そういうところがたくさんありそうな気がします。

【市長】 私は今、学校給食での地場産野菜の消費量を30%にすることにも力を注いでいます。

【隈】 今、世界的に都市農業は注目されていて、これから予期せぬ自然災害などが起きたときに、自分のところに畑を持っているというのは、すごく大きな宝であり、武器になると思います。三鷹の市民と農業がつながっているという姿を、僕はすごく楽しいことだと感じました。例えば、キウイを栽培している農家があると知ったときには、まさか三鷹とキウイが結びつくとは思ってなくて、すごいと思いました。またさらに、キウイがワインにまでなっている。このように、大地から産業までつながっているものが三鷹で生まれつつあるというのは、素晴らしいことです。東京の人はまだほとんど三鷹産のキウイを知らないと思うので、どんどん宣伝してほしいと思います。例えば、毎年気候の変化とキウイワインの味の変化を市民が共有できるようになったら、ますます三鷹というまちに愛着を感じるようになるのではないのでしょうか。そういうことをうまく



活かして、それが三鷹全体のアーバンデザインにつながっていくと、面白いと思いますね。

先駆けて取り組む

“産業中心”から“人中心”のまちづくり

【市長】 今、私たちは天文台の森にいるわけですが、“百年の森”構想というのは、ここのようないわゆる「森」を作るということではありません。さまざまな仕組みをもって、ネットワークを結んでいく中で、いわゆる「森」の部分もあるけれども、駅前のようにぎわいの空間ではまた別の形の「森」になると思っています。“百年の森”を象徴するシンボルゾーンを作ったうえで、全体としてはさまざまな緑化の仕組みを整えて、それを行政としても支援しながら、周囲の建物の建て替えに準じて一定の方向性に向かっていきたい。そしてまた、従来はにぎわいと緑の問題は相反するものだったのですが、今は人やまちがにぎわっていくために緑を生かす技術ができています。ですから、そこをなんとか追求したいという思いです。

三鷹のまちには元々、いくつものまちの顔が分散して存在しています。これからは、それぞれのまちの顔を活かしながら、どうやってつなげていくかということが大きなテーマです。市内には大きな森という規模ではなくても、各地に大きな公園、大きな樹木などの緑の塊があります。仮に駅前に「子どもの森」ができたとしても、最初は森を小型版にしたものに過ぎないという感じがするかもしれません。でも、市内の緑の塊とネットワークを結びながら、建て替えに応じて駅前に少しずつ緑を増やしていけば、100年後には本当に想像もつかない、都市と自然が混ざったような緑のまちができる。他にはなか

かないような、三鷹のまちが出現するのではないかと思います。

こうしたまちづくりは三鷹だけではなく、東京全体も含め日本の抱えている課題を解決するために同じような展開になっていく可能性があって、これからは公園などの緑の豊かさや歩いて楽しいまちであることが、まちづくりの中心的なテーマになっていくのではないのでしょうか。これまでは産業社会で、産業が中心のまちづくりでしたが、人が住んでいる住宅が中心となる。そういうまちが求められるはずなので、三鷹はそこに先駆的に取り組んでいきたい。「住みやすいまち三鷹」が中心的なテーマになってきたときに、それを具体的にまちのデザインとして表していくにはどうすればいいかということで、先生にさまざまなアドバイスをいただきながら、イメージを作っていきたいと思っています。

【隈】 歩いてみて感じたのですが、三鷹の駅の周りには歩けるまちの可能性を持っていると思います。郊外の駅前ロータリーの周りには、歩く気がしない場所も少なくありません。よく、「新幹線の駅前には歩く気がしない。それでシャッター通りになる」といわれていますが、それに比べて三鷹って歩く気がするんですね。ある種、郊外だけどころちゃんと歩ける様相を大事に守ってきたまちが三鷹なのだと思います。それがいよいよ、交通の問題でパンクしかけているのを整理し直して、歩けるけどちゃんと機能も収まっているまちにしていくことを、現代の技術でやってみる価値はあると思います。今、DX(デジタルトランスフォーメーション)で交通の処理の仕方と情報の使い方、情報技術と空間デザインなどを組み合わせることによって、今までの空間では解けなかったような問題が解けるようになってきています。国も「スーパーシティ構想」でそれをやろうとしています。スーパーシティはゼロからまちづくりを始めるような形です。でも、三鷹の場合は、今あるまちをうまい形でスーパーシティ的に変質できるのではないかと思います。緑化ひとつをとっても、日本人は小さい緑の使い方がすごくうまいですね。坪庭を見ると世界中の人がびっくりして「図面で書くとこんなに小さいのに、なぜこんなに緑を感じるんだろう」といいます。それは、小さなものに人間をうまくフォーカスさせて緑を感じさせる技術、日本人独特の緑の使い方のようなものと言ってもいいかもしれません。単なる平面的な緑の使い



方ではなく、垂直的な緑、空中の緑など、いろいろなバリエーションをうまく使うと、今までのまちの密度と緑をうまく合わせるができる。そこに市民向けのサービス機能も入ると、さらによいと思います。今までの市民サービスは、少し離れた場所に大きなビルを建てて行くことが多かったと思いますが、一番便利な場所に市民が欲しい機能を入れ込んでいくような形が三鷹には向いていると思うので、そういった複合化も期待したいですね。

【市長】 そういえば、ジブリの美術館の中にある吹き抜けの空間には、上の方に小さな橋があって、そこへ上がっていくのはエレベーターでも階段でももちろんできるのですが、宮崎駿さんが、子どもがようやく通れるくらいのらせん階段の仕掛けを作ろうと考えられたんです。それは普通、建築基準法ではなかなか設置が難しく、遊具という形でようやく取り付けが可能になりました。でも、その仕掛けがあることによって子どもがワクワクするし、大人もワクワクして、行ってみたいと思えるんです。まちの中にこうした、ワクワクする空間や仕掛けを作るといっても面白いと思いますね。

【隈】 今は、建築基準法の考え方もずいぶん変わってきています。建築基準法ができたのは、自動車が一番の主演だった時代で、情報技術も何もない時代にできた法律なので、今の時代に合わなくなってきたものを見直していこうという大きな流れが出てきました。私が手掛けた建物に木が使えるようになったのも、建築基準法の中で木が使いやすくなったからです。そういう意味では建築基準法もずいぶん今の状況に合ったものになりつつあるので、そうした変化をうまく活かして使ってみてほしいですね。



河村市長×隈研吾さん お互いに期待することとは

【市長】 三鷹のまちがこれから大きく変わっていく、変えていかなければいけないというときに、都市のデザインの力というのは、すごく大きなものだと思います。建築物はずっと残るものですし、まちに新しいものができるということは、市民の皆さんに対して一種のプレッシャーをかけることにもなります。もちろん、新しいものに次第に目が慣れてきて、馴染んでくるということもありますが、できることなら初めから親和性のある、皆が望んでいるようなものを作りたい。建物の力、デザインの力というところでよく、「神は細部に宿る」と言われることがありますよね。細かなところに出てくる具体的なものが、本当に皆の生活に響いてくるので、今回先生には、大局的なところでさまざまなビジョンを描いてもらうこともお願いしたいのですが、それと同時に個別のところでもまた、いろいろとご相談に乗っていただきたいと思っています。ぜひ、これをご縁に迷惑だと思わず、深く三鷹に関わっていただけたらと思います。

【隈】 僕が市長にお願いしたいのは、単なる発注者というのを超えて「一緒に考える」というスタンスで作っていただけるとのことです。普通、日本の市長さんはどうしても、単なる発注者で、予算・規模・使い方・機能など全部が決まった後で依頼されることが多いのですが、いいものを作るには一緒に揉んでいくということがとても重要だと思います。ですから、一緒に考えて、一緒に揉んでいく。そういう関係で作れたら、今までのまちづくりとは違うことができるのではないかと思います。“百年の森”構想では、本当に今までのまちづくりとは違うことをやろうとしている。そのためには僕自身も、今までと違う形で進められたらいいと考えていますので、ぜひよろしくお願いします。